The Way to Abroad of Disaster Risk Reduction Education

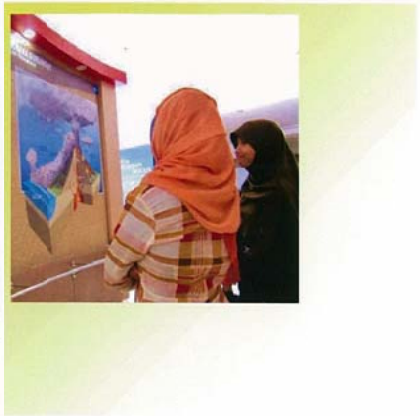
防災教育を海外へ

発行日:2013年1月
発行者:立命館大学国際部国際協力学生実行委員会(CheRits)
〒603-8577
京都府京都市北区等持院北町56-1
立命館大学衣笠キャンパス 明学館1階 京都国連寄託図書館 気付
http://www.cherits.com
remember_tsunami@cherits.com

＊2012年度防災教育チャレンジプラン支援事業

Published on January, 2013
Published by **CheRits** (Students Executive Committee for International Cooperation,
Division of International Affairs, Ritsumeikan University)
address: c/o Kyoto United Nations Depository Library,
Ritsumeikan University Kinugasa Campus, Meigakukan Hall,
56-1, Tojiin-kitamachi, Kita-ku, Kyoto-city, Kyoto, 603-8577, Japan
e-mail: remember_tsunami@cherits.com
web site: http://www.cherits.com

* Supported by *Disaster Management Education Challenge Plan* 2012



The Way to Abroad of Disaster Risk Reduction Education

防災教育を海外へ

2012年度
防災教育チャレンジプラン
支援事業

CheRits
立命館大学国際部
国際協力学生実行委員会

2012年度
防災教育チャレンジプラン
支援事業

Supported by *Disaster Management Education Challenge Plan* 2012

The Way to Abroad of Disaster Risk Reduction Education

防災教育を海外へ

CheRits

立命館大学国際部国際協力学生実行委員会

Students Executive Committee for International Cooperation,
Division of International Affairs, Ritsumeikan University

桜よ、咲き誇れ、
日本の真ん中で咲き誇れ

日本よ、咲き誇れ、
世界の真ん中で咲き誇れ

Wahai sakura,
mekarlah.
mekarlah dengan penuh bangga,
di seluruh pelosok Jepang.

Mari Jepang,
bangkitlah.
ngkitlah, dengan percaya diri,
di dunia ini.

"桜よ"(一部抜粋)
en塾

＊ 2013年1月18日にジャカルタで行われるはずであった
安倍総理大臣の演説で紹介されている歌。
2011年3月11日の東日本大震災の悲劇を知り、
ジャカルタの日本語ミュージカル劇団(en塾)が作曲した歌。
(アルジェリアでの邦人拘束事案について直接指揮をとるため、
予定を早めて帰国することとなったことにより、行われなかった)

* A song which is introduced in a speech of the Prime Minister Abe intended to be given on 18 January 2013 at Jakarta but actually not. This song was composed by a member of "en juku" a musical group organised by Indonesian people for performing musical in Japanese. This song cheers Japan, which hit by the Tohoku earthquake in 2013, to reconstruct like as cherry blossoms blooms in spring after winter.

目次
Outline

プラン概要 Our Plan 2-9
成果 Achievements 10-11
課題 From Now 16-17
学び Lessons 12-15
付録 Appendix 18-20

要約

まだ防災教育・防災活動が浸透していない地域において、これらを定着させるには、外部者が何かを実施して一時的な防災力をあげるだけではなく、地域住民が主体的に取り組みを実施する必要がある。よって、地域防災教育・活動を担う地元の人材の育成を行うのが、本プランである。

人材育成に際し、注目すべき能力を4つに分類し、それぞれの能力向上を目指す。支援者と対象者がともに地域防災教育・活動を考えていく過程で、彼らの変化に注目していくことで、彼らのキャパシティディベロプメントができているかどうか判断できる。ただし、これは時間を要することである。

人材育成の際には、適切な人材(リーダーとなれる人材)の発掘と第3者的立ち位置の現地カウンターパートの存在が重要である。また、4つの能力のうちとくに「創意工夫」が重要であると思われ、外部者だからこそ持てる視点から彼らの成長を支える必要がある。

Summary

In order to have disaster mitigation firmly established in areas where it is not common now, it is not enough that outsiders offer some disaster risk reduction education to raise their awareness temporarily, but inhabitants have to be keen on disaster mitigation of its community. This could be achieved by human resources development, like this plan.

We try to develop four capacities probably required for those who take the lead in informing disaster mitigation to community members through the process of considering suitable disaster risk management with outsiders.

What we found important is; outsiders have to find appropriate leaders for disaster mitigation; we need local counterpart as the third party; "spoonful of sugar" is the most important capacity; and we are supposed to support them by finding strengths that only we can

当プランは

「インドネシアにおいて防災教育を担う人材を育成する」

ものである。

当プランのポイントは以下の3点である

1. 防災教育(防災活動)を海外(インドネシア)に！

防災教育が一般的でない地域において、"災害に備える"ことを定着させていく。

インドネシアなどの発展途上国においては、ハード面の防災に手が回らないことがしばしばあるようである。また、日本などはハード面の防災もすすんでいるが、このハード面の防災が100%役立つとは限らない。これらを考慮すると、ソフト面の防災、つまり、防災教育、災害に対する備えなどの充実がリジリエンス向上に不可欠であると判断する。

2. 現地で防災教育を担う人材を育成！

つまり、日本人が防災教育を実施してあげるというものではない。

というのも、日本人が防災教育をしても、瞬間的に被教育者の意識や知識を向上させられるだけで、"災害に備える"ことを定着させることはできないからである。

防災教育の持続性を考慮すると、現地で継続的に防災教育を行う人材を育成する必要がある。

3. 防災教育を担う人材として、地域青年団にアプローチ！

災害時に自助・共助(互助)が役立つことを考慮すると、地域コミュニティにおいて防災を考え、必要に応じて地域の人々に防災を教える(防災教育)ことができる人材を育成する必要がある。よって地域コミュニティの構成員を人材育成の対象とする。

インドネシアにおいても、2004年の津波以降、国家防災庁などの防災行政の整備や、防災に関する研究(火山の監視システムなど)も進められると同時に、学校における防災教育のための教材が財団やNPOなどによって作成されたり、防災教育を課外学習として実施する団体や、学校(とくに高校)における防災クラブ活動の支援を行なうNPOなども増えてきている。しかし、自分たちの地域の防災を考える、地域コミュニティ構成員による防災組織はほとんどない。これを考慮しても、コミュニティの中において防災教育を担う人材育成を行う必要がある。

今回はCheRitsと年齢が近い地域の青年団を主な対象者としている。ほかにもコミュニティには、主に男性で構成される自治組織、既婚女性で構成される婦人会があるが、今回青年団を選んだのは、他の組織に比べ、青年団は年齢的にもより対等に話ができる上、組織の役割が比較的少なく、防災に関わる取り組みを付加できる可能性が高めであると判断したためである。

This *challenge plan* is for

"empowering community people in Indonesia so that they can continue disaster mitigation activities in their community"

There are three important points in this plan as follows:

1. Do disaster risk reduction (DRR) education in Indonesia

Mainstreaming disaster preparedness is important in areas where DRR education is not major so far.

Developing countries, like Indonesia, seem hard to afford physical disaster mitigation. And it is also true that disaster mitigation infrastructure cannot always save our lives, as it did not on 11 March 2011. Therefore, social disaster mitigation , like DRR education or disaster preparedness, should be essential.

2. Develop human resource for DRR education

This is not a project that Japanese people visit Indonesia and do DRR education for Indonesian people but that Japanese people and Indonesian local people work together for disaster mitigation of an Indonesian community and, though this, we develop Indonesian people's capacities needed to be disaster mitigation leaders in their community.

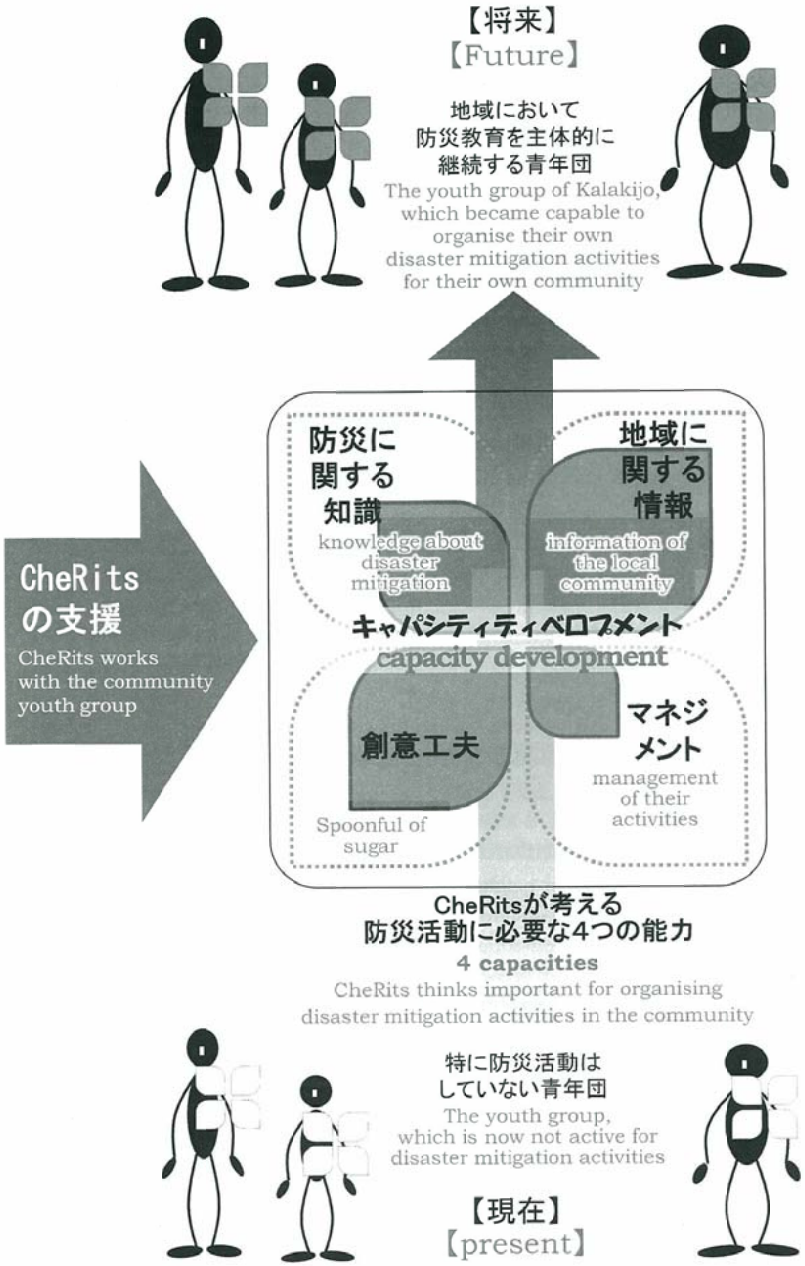
This is important because, even though our lectures could raise awareness or knowledge about disaster mitigation, it does not last so long and those who took these lectures cannot continue disaster preparedness.

3. Approach to the community youth group

Regarding that self-help or neighbour-help save our lives at disaster time, we need someone who consider community's disaster mitigation and keep informing about it to their community members. This is because there are no community group organised by these kind people, though Indonesia formed disaster management agencies or has some NPOs which provides educational material for disaster mitigation and so on after the tsunami in 2004.

The reason why CheRits approached to the youth group is that they are as old as we are and easier to discuss on an equal footing and they comparatively has a fewer roles than community self-government organisation or women's group.

プラン概要
Our Plan



"防災教育を担う人材"に必要と思われる能力は、以下の4つに分類できると考え、これらの能力を伸ばすこと(キャパシティ・ディベロップメント)ができるよう、青年団とともに、地域防災教育の立案を目指した。
(左図参照)

<防災に関する知識>
ハード面での減災処置(家具を壁に固定するなど)や発災時の対処行動(頭を保護する、適切に避難するなど)の一般論を知り、地域の人々に伝えることができる。

<地域に関する知識>
コミュニティ内の人々やコミュニティの環境を知り、その多様性や状況を踏まえて、防災に関する一般的な知識を応用させることができる。

<創意工夫>
コミュニティの人々(特に子どもたち)に防災について伝える、もしくは彼らとともに地域の防災について考えるときに、より興味を持って積極的に参加してもらえるような工夫ができる。

<マネジメント>
地域の防災教育を実施するにあたり、地域住民に参加してもらうための広報や必要経費の調達、その他ロジスティクスを考慮し、うまく運営することができる。

We suggest that the capacities required for disaster mitigation leaders are classified in four as follows and in order to expand these capacities, we cooperate with the youth group in drafting DRR education in the community. (see also the figure on the previous page)

<Knowledge about disaster mitigation>
Understand well the basic ideas of physical disaster mitigation (like fixing furniture on a wall) or disaster responses (like protecting our heads or evacuate appropriately) and teach well these ideas to inhabitants.

<Information of local community>
Know well the people in the community and the environment of the community and, based on these information, arrange well the basic ideas more suitable for the community.

<Spoonful of sugar>
Come well up with various ideas in order to 'help the medicine go down in a most delightful way' or help inhabitants, especially children, be more interested and participate more actively when the youth group teach them or consider with them disaster mitigation.

<Management of their activities>
Manage well public relation, cost, or other logistics when the youth group organise disaster mitigation activities in their community.

プラン概要
Our Plan

●火山噴火のメカニズムや監視システム、避難方法などに関して知識を増やす

2011年3月・9月および2012年3月に、おもに地震および火災発生時の対処法を青年団に伝えてきた。よって、今回は火山噴火を対象の災害とした。

ジョグジャカルタ特別州では2011年10月・11月にムラピ火山が100年に一度といわれる大噴火を起こしている。当プランを実施している村は直接的な被害はうけていないが、州内では広範囲にわたる降灰や火砕流などによる被害、および雨季であったため火山灰などを含んだ洪水などの二次災害などにより大きな災害となった。この被害を受けて、またムラピ火山がジャワ文化の世界観において重要な要素であることも踏まえ、火山による災害に関する知識の充足の必要性が高いと判断した。

火山噴火に関する知識を増やすため、今回は現地にある施設(ムラピ火山博物館)を活用することとした。これは、外部者であるCheRitsがさまざまな資料をあたって調べた情報をレクチャーするよりも、多くの情報が視覚的にもそろっており、被災地から発掘された物品などによりリアルに感じることができる上、行政レベルでの防災(噴火監視システム)を知ったり、過去の災害についても知ったりすることができる点、そして科学と神話が彼らの感覚において共存されている点が、地域の青年団の学びにとって有益であると判断したためである。

●ムラピ火山博物館への地域防災社会見学を実施する

2012年3月に地域の防災教育として9月に何をしようかと、地域青年団とともに考えたとき、彼らからは避難訓練や小学校でのレクチャーなど、過去にCheRitsがやってきた内容の模倣的案しか出てこなかった。これらの活動も十分意義のあるものであるが、これでは将来的な地域防災活動の選択肢が限られたものになってしまうと考え、目先を変えて、防災関連施設に子どもを社会見学に連れていくことを提案した。ムラピ火山の噴火から落ち着いた時期であり、上述のとおりの利点がある施設であることから、地域の子どもたちにとっても訪れる価値のある場所であると同時に、日本のように社会見学や遠足が恒例行事でない(これらが実施できる学校は資金が潤沢である証)子どもたちにとって楽しい思い出をつくるとともに防災を学ぶことができるからである。

また、博物館の展示物を活用しながらも、子どもたちに火山のメカニズムや防災に関して理解してもらう工夫することによって、青年団のキャパシティディベロプメントを行なうことができる。というのも、博物館の展示物は子どもにとってはやや難しい部分もあり必然的に工夫しなければならないからであり、加えて、より子どもが楽しめる一日にするよう、積極的な工夫もできるからである。現在、いくつかのグループを作り、各グループに青年団リーダーを配置するほか、クイズラリーなども考えられているようである。

●地域の人々と協力し、地域の多様性を加味した防災教育を行う

日本の場合、地域にどんな人がいて、特に高齢者や子どもがどこに住んでいて、災害時に助けを必要とするかを把握することから始まるが、インドネシアの場合は、お互いが大体顔見知りであり、だれがどこに住んでいるか大体すでに知られている。よって、そのすでにできている関係性を活用して、地域の防災活動を考えていくことが課題となる。はじめは青年団のみにアプローチしていたが、青年団の活動が地域の大人たちに認められることが彼らの活動の持続性を担保すると感じられたため、地域の婦人会や地域の小学校の先生の協力も仰ぐこととした。これにより青年団が彼らの視点からのみで地域の子どものための防災教育を考えるよりも、先生の立場からのより教育的な視点や、婦人会の立場からのより親世代的な視点を踏まえることができ、より有意義な防災教育が考えられ、青年団の成長につながっていると感じる。

●地域の環境を把握する

今回は火山噴火を対象災害としている上、立地上噴火時の危険区域には含まれないため、地震や火事などのようにコミュニティ内の避難経路確認など地域環境の把握は、今回重視していない

●地域防災社会見学を実施する際の注意点、必要な準備事項の確認のため、下見を行なう

青年団が地域の子どもを連れてどこかを訪問するということは、これまでにやったことがないため、子どもを引率する際に考慮しなければならないことなどを、下見を行なうことによって確認する必要があった。たとえば、大きなバスが通れない道はないか、どれくらいの人数で利用できる場所であるかなどである。また、子どもが迷子にならないかどうか、移動距離が子どもに負担にならないかどうかなど、小学校の先生の視点も大いに役立つ場面もあった。この下見で得た情報をもとに、募集人数や参加費、その他ロジスティクスが話し合われている。

マネジメントに関しては現在、地域の大人の力を借りている感が強いが、マネジメントできる大人を見て、必要なことを学ぶことも青年団の能力向上につながると考えている。あとは、実際に子どもを引率する過程を通じて、うまくマネジメントできたところとできなかったところを認識し、彼らの成長につなげられるよう、サポートしていくことを考えている。

プラン概要
Our Plan

●Enrich Knowledge about Volcanic Eruption and Countermeasure

CheRits has been taught the youth group disaster mitigation in case of earthquake and fire in March and September in 2011 and March 2012. Therefore, we decided to focus on volcanic eruption.

This is because Mt. Merapi in Yogyakarta erupted in October and November 2011 and caused huge damage and losses. This eruption is said the severest one in a century and buried and washed away villages. This was shocking for Javanese people because it plays an important role in their view of the Javanese world. Therefore, it is important to understand the mechanism of eruption and how to mitigate the damages.

In order to improve the knowledge, we decided to visit Merapi Volcano Museum. This is because, rather than being explained by outsiders, materials displayed in the museum or explanations given in their context show the youth a lot. There, we can also learn how terrible the eruption was, historical eruption, administrative countermeasures, how to evacuate, or even myths related to volcanic eruption.

●Hold a Field Trip to Merapi Volcano Museum

We discussed with the youth group in March 2012 what we do in September as a community DRR education. In the Discussion, they just raised the ideas CheRits used to do. We do not deny the importance of its repetition, are rather afraid that limits the variation of community DRR education. Therefore, CheRits suggested to go out for field trip with children. This is because the circumstances has settled after the last eruption, the museum is worth to visit even for children, and children can remember disaster mitigation with happy unusual memory who rarely go to field trip unlike Japan (school which can afford for field trip is relatively richer in Indonesia).

In addition, here the youth's capacity need to be improved. Since the explanation in the museum is a little bit difficult to understand for children, the youth group is supposed to add some ideas. And more positively, they should make the trip enjoyable for children. So far, they are thinking of forming children's groups to take care or doing quizzes.

●Cooperate with community people and hold DRR education which the diversity is taken into consideration

In case of Japan, community disaster management starts from grasp who lives or where people needs help in emergency, however, in case of Indonesia, people already know each other and where they live. Therefore, what we do is utilise this relationship in order to consider community disaster mitigation. After we chose the youth group as the leaders of community DRR educators, we decided to ask the women group and teachers of a primary school help because we found that to be approved by adults in the community supports its sustainability. By doing so, we could include the view of educators and protectors. This raised the quality of DRR education and contributes developing the youth's capacity.

●Understand local environment

this is important in case of earthquake or fire, but relatively not in case of this plan, so we skip.

●Visit the museum for preparation in order to pick out what we have to care or arrange

The youth group has never take children to somewhere under their responsibility, therefore we visited the museum to find what we have to care or arrange for children. For example, whether the bus can go through or how many children can participate. Here the view of teachers play important role to consider whether children never get lost or whether getting on a bus that long makes stress for children. Based of these kind of findings, they now discussing how many children they take or how much participants are asked to pay. It seems adults helps a lot for management, but that also affects the growth of the youth group. And by feedback of the field trip for community DRR education, they could understand in what points they did well or not and could improve their capacity. Facilitating this feedback is also the important role of outsiders.

プラン概要
Our Plan

●一緒に地域の防災を考えてくれるであろう地域青年団が数名見つかった

地域青年団は、およそ15歳以上から結婚するまでの地域の男女によって構成される地域既存の組織である。各地にこのような自治組織が根付いているインドネシアでは、新たにコミュニティの中に組織を増やすよりも、既存の組織の活動に防災に関わる活動を付加させるほうが、既存のパワーバランスを崩したりコンフリクトを生む可能性が低いと判断し、青年団を防災教育ができる人材に育成することにした。このような利点の反面、自動的に所属することになる組織であるため構成員の意識が全員高いとは限らず、ましてや、別の役割を担っていることもあり防災の意識が高いとも限らないという欠点も内包する。しかし、地域の青年が集まって何かできる環境にあること自体大いに評価されるべきであり、万人が防災に興味が高いわけではないのは常である。よって現状を悲観的にとらえる必要はなく、全員に同じモチベーションを求める必要もなく、構成員の中に防災に興味を持ち、ほかの構成員とともに防災活動を引っ張っていってくれる人材を幾人が見つけ出すことができれば十分である。よって、数名の青年団が、この取り組みに参加し、一緒に地域の防災教育を考えていることは、大きな成果である。

●これまでのところ、CheRitsが日本に帰ってきてからも、ゆっくりでありながらも準備が進められていることを考慮すると、地域のための防災活動を担う人材育成の第一歩は踏み出せたと言える

防災活動を担う人材育成を始めた理由として、外部の支援者（この場合のCheRits）がいなかったとしても防災活動がその地域で継続される必要性が挙げられる。よって、CheRitsが現地にいない間も、CheRitsと一緒に考えたことを踏まえて彼らだけで話し合いがなされることは非常に大切である。もちろん、日常生活に付加的な話し合いであるため、話し合いの頻度も多いわけではなく、物事が決まるスピードも決して速くはないが、防災活動のことを考えるために時間を割き始めたこと自体に意味がある。よって、防災活動を担う人材育成の第一歩は踏み出せたと言える。

●4つの能力の向上も、これまでのプロセスの中で行われつつある

前述のとおり、人材育成の観点として4つの能力向上を挙げているが、能力向上は、その達成度以上に、そのプロセスに価値があると考えている。というのも、それぞれの能力を絶対値で測ることは難しいためであり、どのように変化しているかのほうが大切だからである。ムラピ火山博物館に行き、過去の噴火や監視システム、避難方法などを学ぶことによって、子どものために必要な付加的説明などを考えることによって、地域の人々と協力することによって、どのように子どもを引率するかを考えることによって、確実に今までには知りえなかった、そして考ええなかったことに取り組んでいると言え、このプロセスにおいて、それぞれの能力のキャパシティディベロプメントは進みつつあると評価できる。

成果
Achievement

●There are several young people who got interested in and will continue to consider community-based disaster risk reduction.

The youth group is one of the existing local community organisations which are composed of unmarried women and men aged 15 or over. These kind of local organisations exists everywhere in Indonesia. Therefore, we decided to add another function on this existing group rather than creating another group for disaster mitigation in order not to destroy the power balance in the community or not to make conflicts occur. On the other hand, there are some weak points on this local organisation, like not everyone has high ownership because they become a member automatically when the time comes and not everyone has highly interested in disaster mitigation because they are not organised for it. However, we should evaluate that young people in the community can gather for one thing because it is not usual in the world. They can be helpful if we could find some members of the youth group who interested in disaster mitigation and lead the others. Therefore, we made a big achievement regarding some members are active to cooperate.

●So far, after CheRits returned to Japan, they are slowly but steadily preparing the field trip. Therefore, we can evaluate that we succeeded to step forward of capacity development of the youth to be leaders of disaster risk reduction activities in the community.

One of the reasons why we try to develop human resources for disaster mitigation is that, by doing so, people in the community can continue their activities by their own. Therefore, the fact that they sometimes, not often though, gather to consider community DRR education is quite meaningful by sparing their time for doing other things.

●4 capacities we are supposed to increase are developing in this whole process.

We think that it is more important to measure how they changed in the capacity development process than to measure how much capacities they improved. This is because capacities are difficult to calculate in numbers. By newly understand the past eruption or means of disaster mitigation in case of volcanic eruption, by thinking additional explanation for children, by cooperating with people in the community, or by thinking how to lead children, the youth group members struggle with the they never knew or never considers. This could be said that they are on the way of capacity development.

学び
Lessons

外部者によって
防災活動を担う人材を育成するにあたり必要なこと

1. 現地カウンターパートを見つけること

当プランの成功に重要な役割を担っている存在として、CheRitsのカウンターパートのインドネシア・ガジャマダ大学の学生が考えられる。どのような役割を担っているか以下の2点に整理する。

＜関係性を三角にする＞

支援者と対象者の関係においては、どうしても支援-被支援という上下関係ができてしまう。とくに防災教育の文脈では、教える-教わるという関係ではなく対等に学ぶことの必要性が言われていると思うが、これを考慮しても、上下関係を打開する必要性がある。とくに国際貢献の場においては、日本は防災に優れた国だというイメージが強く、余計に上下関係が形成されがちであるが、日本から紹介できるのは一般論に過ぎず、対象者自身が知っている地域の情報や状態にうまくリンクできて初めて価値が発生するのである。以上を考慮し、この関係性の打開策として、カウンターパートを第3極に据えることが重要であると考える。このカウンターパートは支援側に非常に近い存在であっては意味がなく、支援者の文脈も理解し、かつ対象者の意見も理解し、それをうまくつなげることのできる独立した存在である必要がある。適当なカウンターパートを見つけ、信頼関係を築くことが第一歩ともいえる。

＜さまざまな面での橋渡し役＞

インドネシアに関していうと、イスラム教的文化およびジャワ文化・慣習、村独特の関係性など、多くの日本との違いがある。これはインドネシア以外にも言えることであろう。このような違いは外部の人間には見えるようで見えない。よって、より対象地域に近い視点でものを見ることができる、対象者以外の存在による橋渡しが、非常に重要である。また言語の面でも、対象者が日常的に使っている言語を理解できる存在が必要である。

2. 対象者の中にリーダーを見つけること

今回、地域の青年団を防災活動を担う人材育成の対象とした。その理由は記述の通りであるが、青年団の誰しもが、いわんや青年団のリーダーが、防災に対する意識が高いわけではない。その全員の能力を上げようというのは理想的ではあるが現実的ではない。よって、防災に興味を持っているメンバーをうまく探し出し、彼らのキャパシティディベロプメントに重点を置き、防災活動におけるリーダーシップを発揮してもらえるよう働きかけることが大事である。

The two main points required for capacity development of DRR educators by outsiders

1. Find a local counterpart

CheRits has a counterpart organised by students of Gadjah Mada University in Indonesia. They play quite important roles on our projects.

<Triangulate the relationship of outsiders and community members>

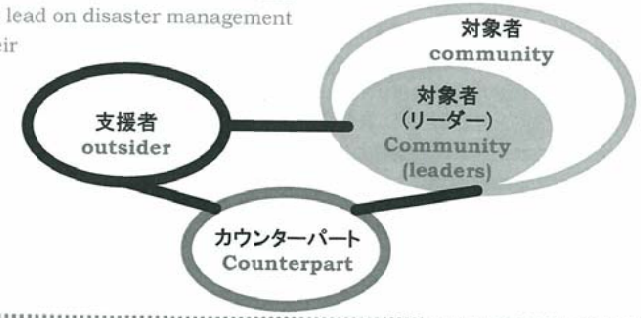
Relationship between those who support and who are supported tends to be vertical. This cannot accelerate creativity as this is also true in the context of DRR education, educators also learn from students. For international cooperation, Japan is regarded as the specialist of disaster management. However, actually, what we can is just offering basic ideas. What makes the basic ideas are useful is creating linkage between these ideas and local information or environment. Therefore, vertical relationship should be broken through. Who can do is the counterpart as the third party like one we have, who understand the logic of outsiders and opinions of community people and who can connect them organically. So to find the counterpart and have good relationship with them would be the first task for outsider.

<Bridge differences>

There are a lot of differences between Indonesia and Japan, like culture, custom, or religion related to Muslim or Java context. That could be hard to understand from outside so we need someone who bridge these differences. Needless to say, we need them as translators.

2. Find appropriate leaders

Not all member of the youth group is highly interested in disaster mitigation because its community organisation is created for different aims. And it is not realistic to be eager to improve capacities of all members. Therefore we need to find some members who will take a lead on disaster management activities in their community.



学び
Lessons

地域のつながりと地域防災
「創意工夫」を助ける外部者の役割

日本は無縁社会といわれ、地域防災の取り組みを通じて、あるいは防災教育において地域を意識することによって、地域のつながりを強化するための「創意工夫」が盛んにおこなわれているように見受けられる。一方、インドネシアは地域のつながりは強いが防災意識は根付いていない。地域のつながりをうまく活用した「創意工夫」ができるようになることで、地域の防災教育が根付くよう、外部者がサポートしていく必要がある。

阪神淡路大震災の際、7割の人々が自助・共助によって生きながらえることができたというのは、よく知られた話である。この共助について、普段の地域のつながりが強いほうがより有益に作用するのではないかと、社会関係資本（社会構造に埋め込まれ、行為者の目的的行為によってアクセスされる資本/具体的には信頼・規範・ネットワークなど）との関連の中で研究されている。また、地域内のみならず地域と外の関係の中にある社会関係資本も、より満足できる復興および災害に強いまちづくりには必要であるという研究もある。

当プランを実施した地域でのみならず、インドネシアにおいては、地域のつながりが強い。当該地域を例にとると、イスラム教の断食明けのお祭りや独立記念日などには必ず地域のイベントを開催しており、そのために地域住民からカンパを集めているし、ゴトン・ロヨン（相互扶助）という文化によって、地域全体のために必要なこと（主に施設）のためにお金や労力を出し合って協力したり、裕福ではない家庭の子どもの教育費の一部を周りの家々で負担したりしている。2006年のジャワ島中部地震の際も地域住民で地域の小学校の再建を計画したり、外部の援助を得たりと、この地域のつながりを生かして、また地域外とのつながりも生かして復旧・復興をしてきた。このような災害時のみならず日常から役に立つ地域のつながりが強い点は無縁社会といわれている日本が見習うべき点であると考えられる。

しかし一方で、地域の協力は防災（とくに災害予防・備え）においては発揮されていないのが現状である。ここで述べるまでもなく地域防災は必要であり、日本では地域防災を通じて地域のつながりを強くする取り組みがされているのと逆で、インドネシアにおいては地域のつながりを生かして（またはさらに強化して）地域防災にも取り組む必要があると言えるだろう。青年団と地域の大人の協力など、それぞれ違う目的のために形成された地域の組織同士（一個人同士ではなく）の協力は日常的にはまれであるが、外部者の働きかけによって協力することで、地域としての取り組みに新たな可能性を生むことができるだろう。また、本人たちが気づいていない地域の強みを外部者の視点から発見することができるなど、外部者は重要な役割を担う。

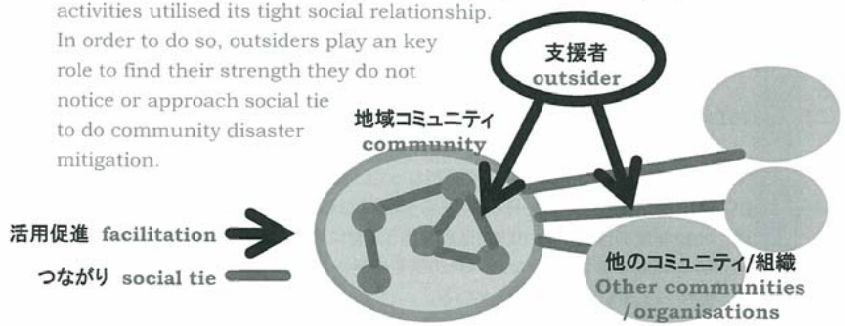
Social tie and community disaster mitigation
Outsiders' role to support "spoonful of sugar"

Japanese society has now few relationship. It seems many disaster management activities take "spoonful of sugar" as schemes of strengthen the community relationship. On the other hand, Indonesian society has tight relationship but not disaster mitigation activities. Therefore, in case of Indonesia, we need "spoonful of sugar" which utilise the social ties in order to increase of disaster preparedness awareness.

At Kobe Earthquake, 70% of survivors helped themselves or are helped by neighbours. Regarding this fact, some scholars study the relation between neighbour-help and social capital in order to explain tight social tie plays important role at emergency. Social capital is a resources embedded in a social structure and accessed by people for their purposes (for example that is trust, norm or social relationship). Not only social capital inside a community but also between other communities are supposed as a key for better reconstruction after disaster.

Not only the community we hold this plan, in Indonesia, social tie is strong. For example in the community, they hold some events at the end of Ramadan or on independence day; community members cooperate with fund-raising campaign for these community events; under the culture of cooperation, named Gotong-royong, they build community facilities. At the central java earthquake in 2006, they cooperate to plan rebuilding a community primary school or ask some assistance of international or national aid organisations. Strong social tie worked also on disaster time.

However, this strong social tie is not utilised in disaster preparedness. Opposite to Japanese effort to strengthen social tie by disaster management activities, Indonesia requires disaster preparedness activities utilised its tight social relationship.
In order to do so, outsiders play an key role to find their strength they do not notice or approach social tie to do community disaster mitigation.



辛抱強く青年団の成長を見ながら、防災活動を担う人材になるよう、今後もフォローアップしていく

1. 2013年3月の活動に際して

主に創意工夫とマネジメント能力の向上に重点を置いてアプローチする予定である。

＜創意工夫について＞

防災地域社会見学の行き先としては、9月に下見をしているムラピ火山博物館と、ムラピ火山山腹被災地の視察が予定されている。被災地は村の移設によって噴火以降手が加えられていない状態が残っているが、自然の再生により当時の凄惨さが薄れつつある段階であるから、今のうちに見ておくほうがいいということで、見学することとなった。

現在、子どもの迷子防止および子どものよりよい理解のためにグループ行動をすることが考えられている。各グループに青年団および小学校の先生、地域婦人会のメンバーがつくことになっており、青年団においては、各グループのリーダーとなり、子どもたちが楽しめるような雰囲気づくりをする予定である。各グループそれぞれ工夫がなされれば、お互いに切磋琢磨できるのではないかと考えている。また、小学校の先生の提案により、社会見学後の感想文の提出が予定されているが、各グループでテーマを与え調べ学習的な要素を持たせ、社会見学後子どもと青年団が一緒に発表の用意をし、それぞれみんなの前で発表をするというスタイルもありではないかとCheRitsは考えており、今後地域住民と検討していく予定である。

＜マネジメントについて＞

参加する子どもの数や参加費に関してはすでに提案されており、あとは移動のバスの手配や会計係の設定などがされる予定である。前回の下見によって防災地域社会見学の実施の際の注意事項は確認されているため、実際に子どもを引率したときに問題が発生しないか、また問題にどのように対処できるかを見ていく予定である。

2. 2013年度以降に関して

人の意識を変え、かつ主体的に活動を行なっていく気になってもらい、それに必要な能力を向上し、継続して活動を行なってもらうようになるには、大いに時間を要する。よって、2012年度の活動のみで防災活動を担う人材に青年団を成長させることができたかどうかを判断するつもりはない。3月の活動を見たうえで、必要な能力開発を検討し、気長にサポートしていきたいと考えている。

課題
From Now

We need to be patient to watch their change and need to follow up them in order to have them be the leaders of the community disaster risk reduction.

1. Related to the activity in March 2013

place an importance on "spoonful of sugar" and "management".

<spoonful of sugar>

In March, we are planning to go to the Merapi Volcano Museum and a disaster are affected the eruption in 2010.

Now they are considering group activities in order to help children understand well or prevent children getting lost. Each group has a school teacher, a member from the women association and the youth group. The member from the youth group becomes a leader of the group and consider how to have children enjoy. This improves together and is good for capacity development. School teacher suggested to have children write some report after the field trip, so related to this, we need to consider how to out put what they learn.

<Management>

They already decided the number of participants and fee, so what they need to do from now is arrangement of buses and decide a person who in charge of the accounts. Most importantly, we need feedback after the field trip to see what they succeeded and not in order to develop capacity.

2. After the activities in March 2013

It takes a considerable time to change their thinking; to facilitate them to do the activities by their own choices; to increase the required capacities; and to continue the activities. Therefore, we are not going to evaluate whether their capacities are developed enough or not. We measure how they changed through a year and what they need to be helped additionally from now.

Appendix 付録

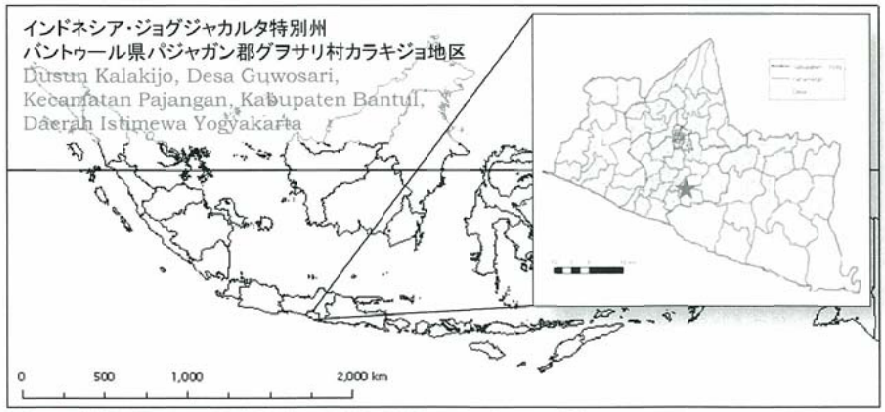
CheRits設立背景

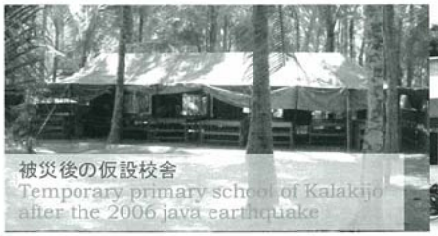
2004年インド洋大津波によってアジア諸国は甚大な被害をうけた。これらの国々から多くの留学生を受け入れている立命館学園(2大学、4中学・高校、1小学校を有する)にとって、この災害は衝撃的なものであり、「学校再建プロジェクト」という支援事業を立ち上げた。この事業によってスリランカに小学校が再建された。またこの事業に共鳴し、学生もなにかできないかと委員会を組織した。

2006年のジャワ島中部地震もインドネシアに大きな被害をもたらしたため、同支援事業はジョグジャカルタ特別州バントゥール県に小学校を再建した。立命館学園としては、この2小学校の再建をもって「学校再建プロジェクト」は終わりをみた。しかし、学生委員会は、これで自分たちの役割も終わりなのか、学校再建のみで復興支援として十分かどうか、などについて自問自答し、被災したコミュニティの復興・発展のためにソフト面から支援を続けることに決定した。これにより、立命館大学国際部国際協力学生実行委員会(CheRits)がスタートした。CheRitsとは、"あたたかく、ここちよい場所を探す(Cari tempat yang Hangat dan Enak)"というインドネシア語と、立命館を意味するRitsを合わせて名づけられた。

CheRitsは2007年3月以降、「学校再建プロジェクト」によってインドネシアに再建された小学校およびその小学校が立地するコミュニティにおいて活動をしている。このコミュニティの名前はKalakijo(カラキジョ)といい、また小学校はSD Muhammadiyah Kalakijo(カラキジョ・ムハマディヤ小学校)という。CheRitsの関心事項はコミュニティ開発であり、被災地ということもあり、"災害に強い"コミュニティを目指している。2012年9月までに14回の現地活動を行なっている。

Kalakijoでの活動のために、CheRitsは、インドネシア・ガジャマダ大学の社会文化学部日本語学科の学生で組織される学生団体をカウンターパートとしている。





被災後の仮設校舎
Temporary primary school of Kalakijo after the 2006 java earthquake

カラキジョ・ムハマディヤ小学校
SD Muhammadiyah Kalakijo

The start of CheRits

In 2004, **the Indo ocean earthquake and tsunami** hit south Asian countries and caused huge damage and losses. This catastrophe is really shocking for Japan, where a lot of disasters happen, especially for Ritsumeikan Academy (2 universities, 4 junior high and senior high school, and 1 primary school), which has many exchange students from those countries. Therefore, Ritsumeikan Academy started "**school rebuilding project**" as a reconstruction aid and rebuild a primary school in Sri Lanka. At the same time, **students of Ritsumeikan University** (a part of Ritsumeikan Academy) **gathered to organise a student group** in order to help this project.

In 2006, another earthquake hit Indonesia, **the Central Java earthquake**. Therefore, "school rebuilding project" rebuild another primary school in Bantul, Yogyakarta, Indonesia. After rebuilding 2 primary school on disaster hit areas, "school rebuilding project" was over. However, the student group considered whether our role is also over here, whether rebuilding school is enough for the community damaged by the disaster, or whether students can do more social approach for community reconstruction. Then the student group reached the answer that **we need to work on community social reconstruction and development** and named the group 'Students Executive Committee for International Cooperation, Division of International Affairs, Ritsumeikan University' or **CheRits**. C of CheRits stands for *cari* (seek), H for *hangat* (warm), E for *enak* (comfortable), and Rits for Ritsumeikan. So we are seeking warm and comfortable place for people.

CheRits stared it activities since March, 2007, in the primary school which 'school rebuilding project' of Ritsumeikan Academy rebuild in Indonesia, and also in the community the primary school is located. The name of community is Kalakijo, and the name of school is SD Muhammadiyah Kalakijo. Our main concern is community development, especially make it resilient against disasters, and did 14 projects related to community-participated disaster mitigation by September, 2012.

For our activities in Bantul, we have a students group as our counterpart organised by students *Juruan Sastra Jepang dan Bahasa Jepang* (Department of Japanese Literature and Japanese Language) *Facultas Ilum Budaya* (Faculty of Culture Science), *Universitas Gadjah Mada*.

記録写真　Photo record of our activities